二松學舍
松苓會
東京支部報

新型コロナウイルスを乗り越えて

支部長　矢澤喜成（50文）

「武漢肺炎」なるものをインターネット上で知ったのは、二〇一九年の十一月だったでしょうか。それから今日迄の長い長い隧道を誰が予測したでしょうか。そして、此の間に運命を、人生を変えさせられてしまった人は幾何でしょうか。

矢澤も、昨年の八月、全国高等学校総合文化祭東京大会の東京都美術館会場の責任者として、作品搬出に当たっていた最終日。味覚異常と咽喉の激痛と発熱に倒れました。幸いオミクロン株で、市販の感冒薬と栄養ドリンクとで乗り越える事が出来ました。

東京都支部では、此の新型コロナウイルスの感染拡大が消えやらぬ間、支部総会・講演会・懇親会や、文学・歴史散歩を控え、役員会の開催も最小限度に抑えて、支部報の発行に専念して来ました。これも会員の皆様の健康と安全を第一に考えた上での措置であり、大方の御賛同を得たものと存じます。そして、昨年度は、感染対策を施して、支部総会と、詩吟と朗読による講演会を漸く開催出来ました。

今年度は、八月二十六日に、支部総会と、俳優水島涼太氏による中洲記念講堂での「一人芝居」と、そして、九段校舎十三階ラウンジでの懇親会を開催致しました。

当日は、大勢の来場者が、水島氏の一人芝居の世界に、暫し浸っていました。また素晴らしい講堂を御提供戴いた大学に感謝致します。

十月二十八日には、今年度の文学・歴史散歩を開催致します。松苓会のホームページでも、御案内する予定です。新型コロナウイルスの終熄は、未だ未だのようですが、五類移行後は、様々な日常が取り戻されつつあります。東京都支部の皆様、どうぞマスクを外して御参加下さい。

東京支部を中心とした関わりの中で

監事　渡辺大雄（65文）

過日、中原敬二事務局長に私が東京支部の役員としていつからお世話になったかをお尋ねしました。すると、二〇一〇（平成二二）年に常任幹事に就任しているとの回答でした。役員としては今年でちょうど十三年目ということになります。その前、一東京支部会員として関わっていたことからも東京支部とは実際にはもっと長い時間、接していたことになります。

私事で恐縮ですが、今夏、東京から千葉へ転居することになりました。東京支部の役員としては、八月二六日の東京支部総会をもって所属が東京支部から千葉県支部へと移行することになります。これまで東京支部の役員の方々、支部会員の方々、他支部の方々、さらには本部役員の方々には、たいへんお世話になりました。また、一昨年からは本部役員としてもお世話になり、とりわけ東京支部役員・本部役員へのつながりを作ってくださったのが、東京支部の矢澤喜成支部長によるものです。

これから新たに千葉県支部としてお世話になりますが、これまでも千葉県支部の総会・講演会・懇親会に何度もお邪魔していますので、自然な形で千葉県支部に溶け込むことができます。同様に東京支部とも今後とも密に連携をとっていきたいと思っております。

私の中では、東京・本部・千葉と三位一体となっている感じがしています。本部役員でもあるので、他県とのつながりや本部の業務をする上で、広い視野と柔軟性をもって松苓会の発展に微力ながら精進したいと思っております。

渡辺氏が千葉支部に移動されることは残念ではあるが、千葉支部において力を発揮されることを期待してやまない。

令和五年度 東京支部総会・ひとり芝居「看取り」

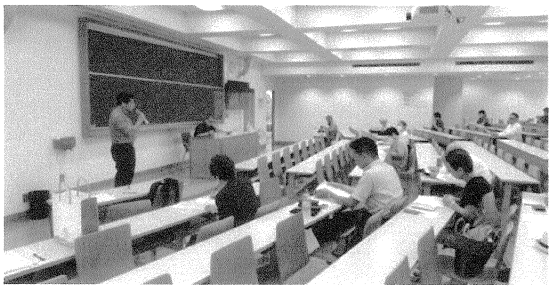
高橋　映子（53文）

八月二十六日（土）、九段校舎一号館で二〇二三年度支部総会が開催された。

２０１号室に参集したのは十九名。司会進行は神河常任幹事（47文）、指名を受けた大渕監事（50文）議長のもと、議事が進められた。

本年度は役員改選にあたっていたが、コロナ禍で活動停止、停滞期があったことを鑑み、支部長は矢澤喜成氏（50文）続投が可決。

続いて、昨年度の活動・会計報告、本年度の活動・予算案について中原事務局長（62文）から説明がなされた。監事による会計監査を終えた事案についての質疑に一同、首を傾げる場面があり、さらに、学内の現況にかかる発言もあり、コロナ5類移行後、初の支部総会は、参加者のナマの声・意見交換が行われる貴重な機会となった。惜しむらくは時間切れ。次年度からは今少し、時間枠に余裕を望みたい。



総会で挨拶をする矢澤支部長

（当日の議題、進行は以下）

二松學舍松苓会東京支部 2023年度総会

日　時　２０２３年８月２６日(土)　１４：００

次　第

支部長挨拶

議長選出

議　題　１．支部長選出
２．監事選出
３．2022年度活動報告
４．2023年度活動案
５．2022年度会計報告
６．監査報告
７．2023年度予算案
８．その他

総会終了後は例年のお楽しみの講演会。本年度は、大学の許可を得て、九段校舎一号館内の中洲記念講堂を会場に、劇団未成年主宰の俳優、水島涼太氏による一人芝居「看取り」（作・演出：水島涼太）の上演。片山幹事長（50文）の粘り強い交渉力と中原事務局長のきめ細やかな段取りにより実現にこぎつけた。

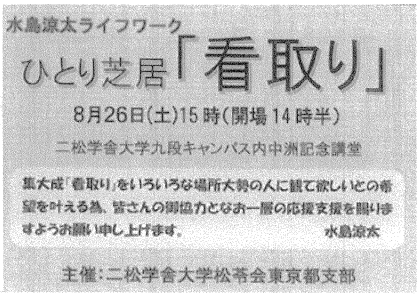
講堂には総会参加者を含め、八十三名のお客さまが集った。同作品は水島さんとお母さまとの実話をもとに編まれた物語。水島涼太ライフワークと銘打たれた、ご自身集大成の作品だ。

しんとした場内、ギタリスト・さかいじゅん氏による「看取り」のテーマ～白い朝～の弾き語りで幕が上がった。老いた母との今生の別れの時を、喜怒哀楽豊かに表現する。息子の、母への愛情は、娘のそれとは明らかに違うことを感じつつ、感情の高まりを止めることができなくなる。

およそ六十分の一人舞台、舞台上の水島さんの呼吸が場内に伝わり、お客さま一人ひとりが各々の父母、家族を想う気持ちでいっぱいになっていた。

脚本、演出　水島涼太
ギター演奏　さかいじゅん
舞台監督　松井明
協力　劇団未成年

劇団未成年 HP の QR コード



二松の風景

常任幹事　原　由来恵（63文）

今年の夏、殆んどのゼミが宿泊での合宿を再開したようである。かくいう中古文学ゼミ（原ゼミ）も、久しぶりに京都への踏査合宿を実施することとなった。

コロナ禍の3年間、合宿が途絶えたことによって、準備などを心配していたが、これまでの卒業生達が残してくれた記録がマニュアルとなり、復活の苦労はあまりなかった。

一方で大きく変わったのが、宿に戻った後に行う踏査先の研究発表とその資料である。これまでは夕食後に部屋に集合して行っていた発表が、各部屋からオンラインとなった。ファイルにまとめ、行く先々で確認していた印刷資料は、PDFデータとなり、タブレットやスマホで見る方法へと変化した。

変わらないで続くこと、伝わることの嬉しさ。変化に対応して進化していくことの大切さ。

学生の楽しそうな笑顔を見ながら感じた夏の風景であった。

ビバ外旅！ 海外旅行

――自然のビーチ「クワタカ」――

副支部長　星野　優子（42文）

コロナの影響で暫く足止めされていた海外旅行をゴールデンウイークから再会した。

シンガポール、スリランカと経由し、バングラデシュに向う十日間の旅である。

バングラデシュの首都ダッカに到着後、夜行バスに十一時間乗車し、未開発のビーチ「クワタカ」へと向かったのである。

「クワタカ」は長さ三十キロメートルに及ぶビーチで、海岸線は幅も広く長い。ベージュとピンク色の細かい大理石で覆われた自然が造形した、素敵なビーチである。ただびっくりしたのは、誰一人として水着姿ではなく、着の身着のままで海に入って遊んでいることであり、（イスラム教の為か？）お国柄の違いを打ち出していた。

ここで一泊し、翌日は海岸線を南下し、ミャンマーとの国境線のナフ川へ移動する。

ミャンマーは治安が悪いので、ここでUターンし、カリブの海賊のような船が浮かぶクワタカの素晴らしい夕日を追いながらダッカへと向かったのである。

平和とは何かを考えさせられた外旅であった。

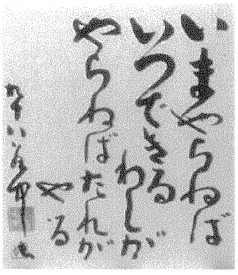
愛師敬愛

――敬愛すべき先輩たち――

常任幹事　神河　秀春（47文）

私の長い松苓会活動の中で、敬愛する先輩方に出会えたことに感謝している。そこで先輩についてふれたい。

杉村正夫氏（専11期）が松苓会事務局長業務をされていた時に伺った40年程前の話。嫌がる加藤常賢学長を無理やりダンスホールと神楽坂の置屋へお連れした翌日、浦野匡彦理事長より、「馬鹿者！なんというところへ学長をお連れしたんだ」とこっ酷く叱られたとのこと。その時のことを、舌を出しながら優しい眼差しで飄々と話して下さったお顔が、今も忘れられない。

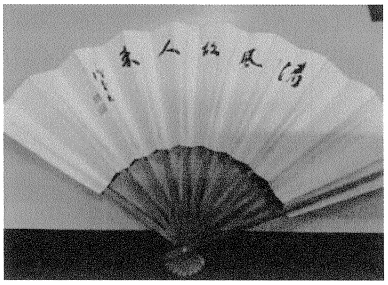


平櫛田中氏の色紙

専門学校18期生には、歴史上の子孫や本学園の子孫が多くいらっしゃった。土肥實忠氏は、JR湯河原駅前広場の銅像土肥実平（鎌倉殿の13人の一人）の子孫である。やや色黒で大柄な体躯をされていた。進眞郎氏は、中洲先生の兄弟子に当たる進鴻渓の子孫である。小柄で物静かな方であった。続いて諫武保夫氏。東京支部の文学散歩には同期の浅井昭治氏と毎回参加下さった。文学散歩中は物静かであったが、その後の懇親の時間には佐佐木鍾三郎先生（専15期）や木村正雄支部長（25期）、我々若手を相手に飲み放しで、マイクを持てば調子はずれの「高校三年生」の独唱。今もって歌声が耳の奥に残っている。

全員が冥界に旅立たれたが、皆さんは今も痛飲し、放歌高吟されているだろう。

異色の先輩としては平岡才二郎元広島支部長（26期）。松苓会総会に出席され、広島弁の大声量の発言で屡々議事は紛糾すること頻りであった。しかし心は真夏の青空のような方だった。懇親会ではいつも「神河さん、あんたがこれ好きだったから持ってきたんよ」と言い、ペットボトルに入れた広島の銘酒「賀茂鶴」を注いでくださった。


石川梅次郎先生（専１）より頂戴の扇子

その時の顔は可愛い（？）後輩に注ぐ満足感に溢れていた。忘れられない一場面である。

最後に湯沢好男氏（25期）もう25年も前になろうか。湯沢氏より突然に自宅へ連絡をいただいた。東京支部総会で幾度かお見かけしてはいたが、22期も上の大先輩であり、自宅に連絡が来る間柄ではなかった。ところが私に渡したい物があるので会いたいとの用件。指定された小平駅に伺うと、湯沢氏は一枚の色紙を持参しておられ、「この色紙をあんたにあげる。これは平櫛田中が書いたもので、内容は正に今のあんたに当てはまると感じたのであげたいと思ったんよ。頑張ってな、二松學舎を頼むよ」というようなことであった。それが写真の色紙である。当時の私に対して、湯沢氏は何を感じていたのかははっきりしないが、今もことあるごとに省みる色紙である。私は湯沢氏の想いに応え得ているか、と。

また石川梅次郎先生の清風の扇を見るとき、二松学舎の精神は家族のような愛の精神だと感じるのだ。

合縁奇縁シリーズ④

多くの縁をいただいて

浅野　米子（51文）

現在、新宿御苑前でカレーと定食の店をママ友と二人で営んでいます。カウンター七席、営業時間11時から14時の小さなお店です。

元々主婦のアルバイトで始めた仕事ですが、二人で独立することになったのです。すると、多くのお客様が力を貸してくれたのです。物件探しから、店の看板や厨房の品々の用意から、引越しまでもお客様が引き受けてくれました。会計士のお客様からは株式会社にとの提案があり、その方の助力で法務局に行ったり、色々な手続きを行いました。今でもその方に会計をみてもらっています。

新しいお店の工事をやっている間は「いろんなお店の味を研究しなさい」と、店の経営の先輩から軍資金を頂きました。新しいお店のチラシについても、「開店祝いに」と広告関係勤務のお客様からのご好意もあったのです。

独立から間もなく十四年になります。本当に多くの方々のご縁と愛を頂いて、まだまだ山あり谷ありですが、二人で楽しく働いています。

筆者とお孫さんたち

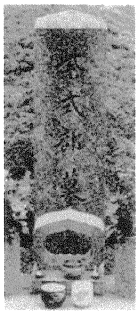
何よりお客様に美味しいものと安らぎの時間を提供して「何だか家で食べているみたいで寛ぐ」と言われると、とても嬉しい気持ちになります。本当に感謝でいっぱいです。

全く予想もできなかった人生ですが、これからも楽しんで、多くのご縁を結びながら、ゆっくりと頑張っていこうと思っています。

古典の魅力①

常任幹事　荒野　陽子（85文）

三年ぶりに高校の古典の授業を担当している。古典に苦手意識を強く持つ生徒は多いが、口をそろえたように「難しいけれど面白い」と言う教材がある。『源氏物語』だ。教科書に掲載されているのは「光源氏の誕生（桐壺）」だが、これが高校生の心を掴むのはストーリー展開によるところが大きい。



高校生にとって古典の授業で扱う内容は簡単には共感を得難く、自然観察や説教臭いものは退屈なようだ。内容が難しいのに古語単語や文法のせいでさらに難解になる。そんな中で帝と桐壺の更衣の恋愛や周りの人々の嫉妬といった、まるでよく見る恋愛ドラマのような展開は多くの生徒の共感を得る。苦手な文法をひとまず置いておいて、次はどうなるのかに目が行く。だからこそ多くの生徒が、「（文法や古語単語、ついでに定期考査は）難しいけれど（話は）面白い」と言うのだと思う。古典は面白い、のきっかけになればいいと思い、授業をしている。

「古典の魅力」は「共感」だと思う。世の中がどれだけ変わっても何百年も変わらない感情があるというのはロマンがある。今、共感できなくてもいつか「これのことか」と思える瞬間に出会える楽しさもあると思う。古典の授業を通して、その種を蒔きたい。

『東方美術』の創刊と錦絵

常任幹事　齋藤　祐一（51文）

錦絵を集めるようになってから三十年ほどになる。とはいえ、幕末から明治にかけて描かれた、能に関わるものばかりである。時間をかけたわりには、ほんのささやかな蒐集に過ぎない。

そもそも歌舞伎などに比べると、能の錦絵は数が少ない。少ないから価値があるというものでもないけれど、それでも折々眺めていると、思わぬ発見もある。そろそろまとめてみようと思っていたところ、『東方美術』という雑誌に、小考を連載することになった。揚州周延などの錦絵を、能の絵画史料として読み解いていくという試みである。

昨年の六月に創刊された『東方美術』（A4版、約百頁、フルカラー）は、東アジアの美術について、広く議論の場を提供する美術雑誌である。二松學舎大学の江藤茂博前学長が総編集長を務めておられ、張仕英氏（浙江越秀外国語学院）とともに、私も編集長を担当している。

創刊号では、田渕俊夫氏（東京芸大名誉教授、日本美術院理事長）、第二号では市川保道氏（多摩美術大学名誉教授）へのインタビューをはじめ、論考や評論などを掲載した。いま第三号の刊行に向けて、編集を進めているところである。

ささやかな蒐集をもとにして、禿筆を呵した小考も、しばらく紙面の一隅を汚すことになるであろう。せめて、刃先をくるわすことなく彫りを進め、色むらなく摺り上げたいと思っている。

シリーズ 大山巡り ① 紫式部に思いを寄せて

副支部長 大山由美子（47文）

顔は地元の日野山、体は京都に向いている「紫式部像」は、福井県越前市の寝殿造りの庭園「紫式部公園」の隅にたたずむ。

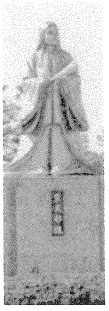
この像は、旧武生市が市制三十五周年記念事業として、一九八六年に建立。

紫式部の父、藤原為時が九九六年越前国守になり、彼女も同行。琵琶湖を渡り、峠を越えて都から離れていく寂しさや、見知らぬ土地での生活への不安を道中の光景に重ねて詠んだ歌が家集にある。「紫式部像」のたたずまいに、当時の彼女の複雑な心情を想像する。

九九七年単身で都にもどり、帰京前から贈答のあった藤原宣孝と結婚、娘賢子を出産。宣孝没後、一〇〇六年に一条天皇の中宮彰子の女房として出仕。彰子の御産や宮廷生活を独自の視点で描き、史料的価値が高い『紫式部日記』の一〇〇八年十一月敦成親王五十日祝宴の記述は、『源氏物語』の成立時期を考察する上で見逃せない。

来春の北陸新幹線の福井県延伸で、越前市に新駅ができることを見据え、「紫式部公園」の隣に「紫ゆかりの館」が二〇二一年四月にリニューアルオープン。越前での暮らしを原動力に『源氏物語』を著すまでを視覚的に学べて興味深い。

来年のNHK大河ドラマは、紫式部が主人公の『光る君へ』。彼女の人生がどのように描かれるかが楽しみである。



三島中洲の塾の精神

幹事長 片山 聖英（50文）

明治三（一八七〇）年に岩倉具視は「海外留学生規則案」を提出。国策として先進諸国に学ぼうとする。

この規則案は費用のほか、何を学ぶにはどこの国に行けばよいかが示されていた。

明治五年「学制」公布により官立学校が設立される。

そうした気運の中、外国語を学ぶ塾が多くできるが、大審院判事の職を退いた三島中洲は時代に逆行するごとく漢学塾二松学舎を明治十年に創立するのであった。

翌十一（一八七八）年には中洲は東京師範学校漢学教授に抜擢されている。

翌十二年には「教育令」が公布され、中洲は東京大学講師に登用される。

このとき五〇〇人以上の留学生がいたが、全員が帰国させられている。この費用と雇外国人教師費用が国費を圧迫していたからだ。

明治十四年には中洲は東京大学講師から教授となっている。これによって東京大学での日本人教師数が外国人教師数を上回っている。

ちょうどこの頃、二松学舎に入学したのが夏目漱石で、次のように回想する。

講義は朝六時か、七時から始まり、寺子屋をそのままに（中略）寄宿料等も廉く、一か月二円位。

この回想の中に中洲が目指した学問の場としての理想がある。安価で学びたい者に学びの場を与えること。

明治十九年に「帝国大学令」が公布。教育に関する法律が整備されていくが、中洲は官立学校の在り方に違和感を覚えて東京大学教授の職を辞している。私立学校の存立の意義を強く感じたからに他ならない。

そのため中洲は明治二四年には早稲田大学講師を、翌二五年には国学院大学や立正大学で教便を執っている。

多くの若者に学びの場を安価に与えるという考え方によって二松学舎の経営は傾いていき、渋沢栄一に助けを求めることになる。

漢学塾を通して中洲は人を育てることに主眼をおいた学びの場を創り上げて、大正八年に亡くなっている。

この流れの中で日本国は日清・日露の勝利によって「一等国」となる。しかし人材教育は失われ、人物の試験の点数評価が中心となり、人を活かす、人を育てるという視点は「箱モノ」化してしまうのである。

昼からすみません！

事務局長 中原 敬二（62文）

登山が趣味であったが、加齢のせいか膝を痛めてしまった。医者から体重を落とすことを勧められたので、ジムに通い、さらに食事の糖質制限を行った。

結果、体重は減ったが膝の調子は今ひとつなのだ。

糖質制限をきっかけに食生活が変化した。痛風持ちでもあるので、ビールや日本酒を避け、焼酎やウイスキーを炭酸割で飲み、タンパク質と野菜で腹をふくれさせ、炭水化物を極力控えるようにした。特に筋トレ後にタンパク質を取ると、筋肉が増えているような気がして、プロレスラーに憧れていた元柔道部員は、だんだん楽しくなってきたのだった。やがて、休日の午前中にジムで筋トレをし、昼からタンパク質をつまみに飲むことが、背徳感も相まって至上の喜びとなってしまっていた。

現在、体重は横ばいで、膝も調子が悪いままだが、やはり酒の昼飲みがいけないのでしょう…な。

会計報告

2022年度　二松學舍松苓会東京支部会計報告

自　2022年４月１日　至　2023年３月31日

（単位　円）

収入の部				支出の部			
科　目	予　算	決　算	差　異	科　目	予　算	決　算	差　異
会費	100,000	62,000	△ 38,000	会報費	90,000	80,080	9,920
支部運営助成費	200,000	200,000	0	通信運搬費	200,000	177,047	22,953
支部報発行助成費	30,000	30,000	0	会議費	10,000	0	10,000
支部総会開催助成費	20,000	20,000	0	総会補助費	0	0	0
雑収入		1	1	振込手数料	9,000	5,645	3,355
				活動補助費	37,200	37,200	0
				交通費	20,000	0	20,000
				交際費	20,000	20,000	0
				慶弔費	20,000	5,000	15,000
				消耗品費	30,000	7,158	22,842
				予備費	5,000	0	5,000
小　計	350,000	312,001	△ 37,999	小　計	441,200	332,130	109,070
前年度繰越金	646,009	646,009	0	翌年度繰越金	554,809	625,880	△ 71,071
合　計	996,009	958,010	△ 37,999	合　計	996,009	958,010	37,999

雑収入：預金利子

2023年度　二松學舍松苓会東京支部予算

自　2023年４月１日　至　2024年３月31日

（単位　円）

収入の部			支出の部		
科　目	予　算	備　考	科　目	予　算	備　考
会費	80,000		会報費	100,000	支部報作成費
支部運営助成費	200,000	松苓会本部より	通信運搬費	200,000	会員への郵送料等
支部報発行助成費	30,000	松苓会本部より	会議費	10,000	役員会開催にかかる費用
支部総会開催助成費	20,000	松苓会本部より	総会補助費	60,000	懇親会費等補助
			振込手数料	9,000	郵便振替他
			活動補助費	75,000	講演会謝礼 文学散歩経費等
			交通費	20,000	役員交通費
			交際費	30,000	他支部祝金等
			慶弔費	20,000	
			消耗品費	20,000	宛名ラベル・文房具等
			予備費	10,000	
小　計	330,000		小　計	554,000	
前年度繰越金	625,880		翌年度繰越金	401,880	
合　計	955,880		合　計	955,880	

事務局から

渋沢栄一氏肖像の新札発行記念

東京支部「文学・歴史散歩」―水天宮・兜町

【町衆の街と近代化する東京を観つめる】

1．日　時：十月二十八日（土）十四時から十七時（予定）

2．集合場所：水天宮の横の通路（人形町通り沿いの屋根の下）

3．コース（予定）

（1）元吉原（葭の原の地）

〔総合型遊郭の創造・娯楽の場―対抗型湯屋の創造〕

①水天宮　②元吉原（末廣神社）

（2）芝居街・町衆の生活―文化・芸術・娯楽・慰安の街

〔江戸最大の芝居街〕

①歌舞伎―中村座・市村座

②岡本玄治店　寄席「末廣」跡

③三光稲荷（関三十郎・猫稲荷）

④「大丸」跡・蔦屋重三郎「耕雲堂」跡

⑤大安楽寺（久能山別院）

「小伝馬町牢屋敷」跡―吉田松陰終焉の地

（3）産業化・工業化への拡大

（城郭から商業建築物によるシンボル化）

①日証館ビル（渋沢栄一邸跡）

②兜神社（商業の神様）

③郵便発祥の地

④銀行発祥の地

※コースは変更になる場合があります。

＊申し込みはグーグルフォームまたはメールにて**十月二十一日（土）**までにお願いします。

○グーグルフォームURL、QRコード

https://forms.gle/jgvGFYqf92kkyPdh8

○メールアドレス k-nakaha@nishogakusha-u.ac.jp

問合せ先：東京支部事務局（大学教務課勤務）中原敬二

TEL03―3261―7406

会費納入のお願い

年会費は二千円。七十歳以上の終身会費は一万円です。

編集後記

新型コロナウイルスの感染症法上の位置付けが、5類感染症に移行したことに伴い、かつての日常を取り戻すだけでなく、活気あふれる東京「サステナブル・リカバリー」の実現が標榜されています。東京支部においても支部行事の活性化が図られています。かつて「コロナ禍」と言われました。「禍」が意味する「災い」には、「災いを転じて福となす」・「災いも三年（置けば用に立つ）」などのことばもあります。新型コロナウイルスの感染拡大は、まだ予断を許さない状況が続きますが、新型コロナウイルスによってもたらされた「災い」についても、働き方や暮らし方をうまく変えて幸せに転じるよう心がけ、時が経った時に、コロナ禍がきっかけでよいこともあったと思えるように、日々を過ごしていきたいと願っております。

（監事　大渕俊明　50文）

◆発行◆
二松學舍松苓会
東京支部　事務局（中原）
電話 090・7941・5116